＜遺跡紹介＞

印旛沼南岸の貝塚（1）

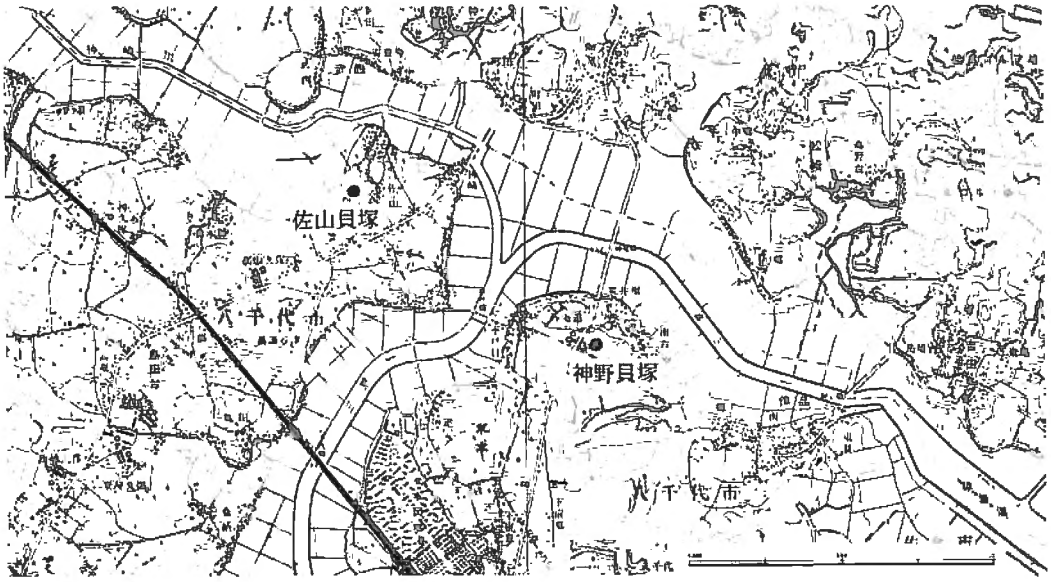
朝比奈　竹　男

はじめに

下総台地の北西部、八千代市に所在する縄文時代の貝塚は、4遺跡が報告（註1）されている。しかし地名表等に記載される遺跡がほとんどであり、調査例は数例あるものの、資料化が進まず、知名度は低くなっているのが実情であろう。今回、ここには佐山・神野（かの）貝塚の2例の概要を記すにとどめ、今後各遺跡について分布調査及び発掘調査の成果を踏まえ、これらの貝塚を資料化してゆきたいと考えている。

八千代市の地形

現在は印旛沼は干拓・水田化されその面影はないが、陸軍参謀本部の「迅速図」を見ると神崎川と新川が合流するあたりが、沼の西端をなしていた。神崎川は更に西に遡上し、新川は市の中央部を南下し、途中、船橋市より流れ込む桑納（かんのう）川と合流する。これら河川により八千代市は、大きく三つの台地に区分される。そしてこれら台地もまた、複雑に樹枝状の谷津が入り込んでいる。



第1図　佐山貝塚と神野貝塚の位置（国土地理院 1／25,000「白井」「佐倉」を縮尺）

水系は印旛沼へ流入するものであり、人為的に放流されるもの以外は東京湾に流入する河川はない。水系のためか台地は全体的に南側が急斜面を呈し、北側が緩斜面を形成する。

佐山貝塚（千葉県八千代市佐山字大山台、外；旧千葉郡睦村大字佐山　所在）

干拓以前は印旛沼の西端となる、印旛沼放水路の新川と神崎川が合流する付近に、船橋市より突き出た形の台地上の北側に位置する。神崎川を北に眺み、北と南に小支谷が入り込む台地上に所在する。標高19～21ｍの高さに占地し、自然地形と思われる僅かな馬蹄形状の高まりが認められる。水田面は標高４ｍ未満と低く、南側の谷津には現在も湧水点がある。現状は畑地と山林及び、一部元からの宅地となっている。一方、近隣まで新たな宅地造成等による開発が迫っており、自然環境は大きく変わろうとしている。

1974年佐山貝塚発掘調査団が「印旛沼周辺地域における縄文時代後期の貝塚のうち、淡水産貝類を主体とする貝塚の様相を明らかにすることを目的として（文１）」一部調査を行っている。この時、貝塚の分布範囲を含む測量が実施され、馬蹄形状を呈するものと捉えられた。貝塚の規模は南北200ｍ、東西140ｍで、北に開口部を有し、貝の層厚は平均15㎝程度であったという。貝層中からは加曽利Ｂ・安行Ⅰ式土器片が出土し、縄文時代後期後半に貝層形成されていることが、捉えられた。

貝塚の構成貝類は、汽水性のヤマトシジミを主体として、淡水性ではヒラマキミズマイマイ・ヌマガイ・カワニナ、鹹水性ではハマグリ・アサリ・オキアサリ・マガキ・マテガイ・キセルガイ・オオノガイ・オキシジミ・アカニシ・イモガイを認め、獣骨としてはシカ・イノシシ・タヌキ・サル、鳥骨はカモ、魚骨はスズキ・クロダイ・ボラ・コイが出土している（文１）。

分布調査の表面採集資料（文２）によると、縄文中期（加曽利Ｅ）、後期（称名寺・堀之内・加曽利Ｂ・曽谷・安行Ⅰ・Ⅱ）、晩期（安行Ⅲａ・前浦）の土器の散布が確認されており、その中でも加曽利Ｂの採集が多い傾向を示している。74年調査では石鏃・磨石・石皿・磨製石斧・軽石・スクレーパー、土製円盤・土偶、骨鏃・ヤス・銛、等が出土している。また、佐山貝塚出土と考えられる、地元の方々が収蔵する磨石が、数多く確認されている。

神野貝塚（千葉県八千代市神野字築地　外；旧印旛郡阿蘇村大字神野　所在）

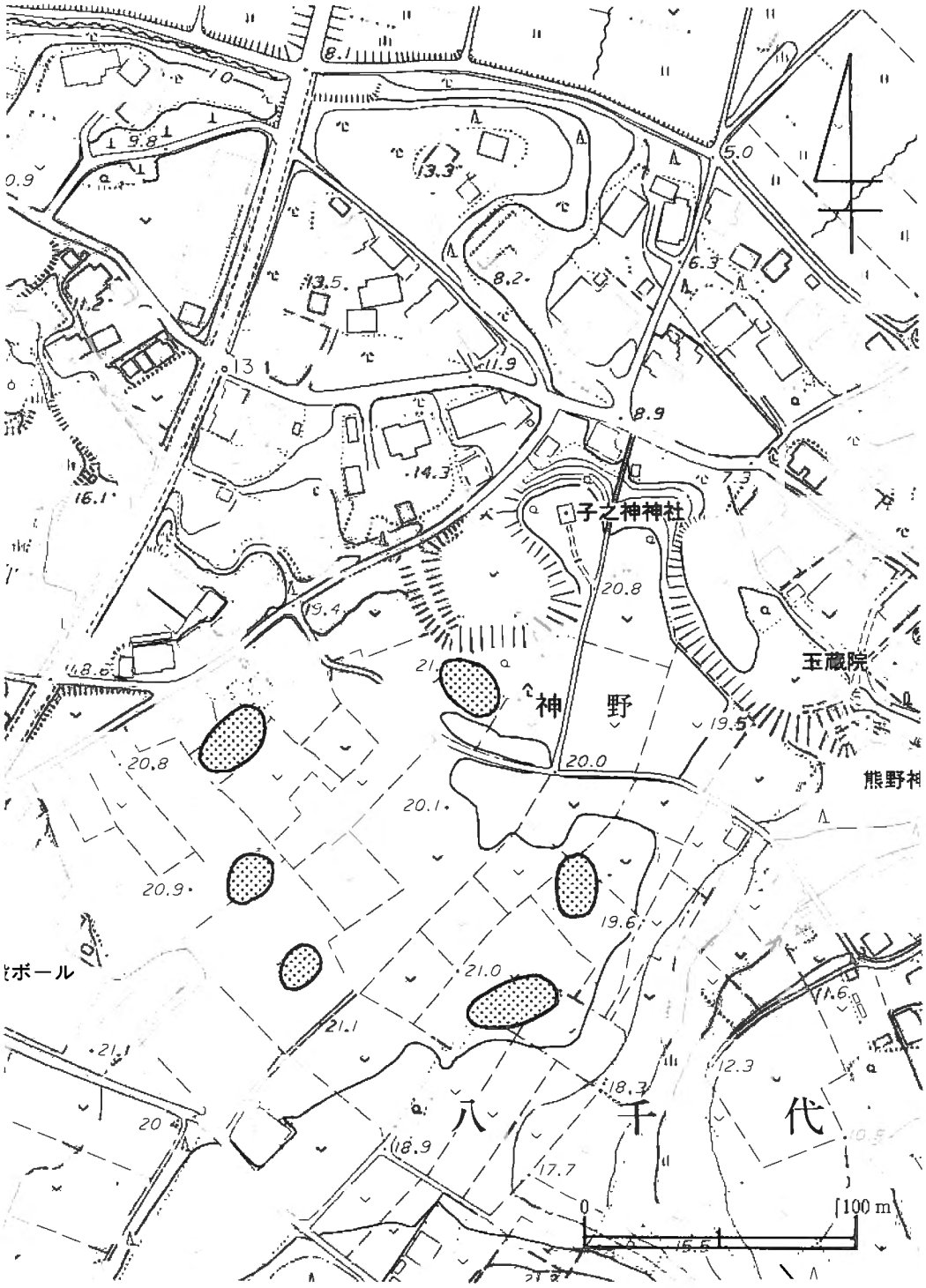
本遺跡は、かって酒詰仲男氏に「阿蘇神野貝塚」として報告（文３）されており、佐山貝塚より所在確認は早かった貝塚である。

旧印旛沼（現水田）を眼下に見下ろす、台地上平坦面から緩斜面にかけて所在する。標高19～21ｍを測り、水田面との比高は15～17ｍである。東側に谷津が入り込み、標高18ｍ付近から急傾斜で、この谷津に下る。

現状は畑地を主体に山林、工場が所在し、本遺跡が占地する同じ台地上西側は、神野芝山古墳群として一部調査を実施している（文４）。

第２図　佐山貝塚と周辺地形

（八千代市「八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世」挿図を改図）



第 3 図　神野貝塚と周辺地形

（千葉県教育委員会編「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」図を改図）

佐山貝塚

神野貝塚

貝層は6地点確認される地点貝塚であり、ヤマトシジミを主体とした貝塚（註2）である。いずれも小規模な散布であり、将来測量図作成が望まれる。

分布調査によれば（文2）縄文時代中期（阿玉台・加曽利E）、後期（称名寺・堀之内Ⅰ・Ⅱ・加曽利B・安行Ⅰ・Ⅱ）の土器散布が見られ、未調査の貝層形成期を即断できるものではないが、中期土器片の多さがめだっている。

なお、今回図示できなかったが、南西の畑にやはり小規模な貝の散布が見られる。この地点は土師器の散布が見られ、時代が異なるのかもしれない。

（八千代市教育委員会　社会教育課）

註1　八千代市内所在の縄文時代の貝塚で、現在確認されているものは、佐山・神野・保品・下高野新山の4遺跡である。保品貝塚については、1902年大野一郎氏「北相馬・印旛・稲敷三郡に於ける貝塚の淡鹹及び土器の厚薄分布表」（考古学雑誌　17-11　1902年）以来、酒詰氏や、伊藤和夫・金子浩昌両氏とも報告されているが、現在所在は未確定となっている。今後、現地踏査を重ね、所在確認に努めたいと考える。

註2　酒詰仲男「日本縄文石器時代食料総説」1961年においては、シジミ類と記載されている。

文1　八千代市史編さん委員会「八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世」　1992年

文2　八千代市教育委員会「八千代の遺跡」　1983年

文3　酒詰仲男「千葉県印旛郡地方遺跡概説」　人類学雑誌54－8　1939年

文4　村田一男他「八千代市遺跡分布調査概要　付　八千代市神野芝山2号墳発掘調査概報」　1972年　八千代市教育委員会

参考文献

酒詰仲男「日本縄文石器時代食料総説」1961年

伊藤和夫・金子浩昌「千葉県石器時代地名表」1959年

千葉県教育委員会「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」1983年